学　年	教科等	単元名	日　時
第６学年	国語科	人物どうしの関係を考えよう（教材：風切るつばさ）	令和５年７月７日（金）６校時

研究主題	自律的に学ぶ子どもの育成
研究内容１の手立て	**【子どもが自覚的に問いを解決する学びのプロセスの在り方】** 本時では、導入において、クルルとカララの会話部分が必要かどうかについて、各自の考えとその理由をタブレット型端末で提出させ、全体で確認する。その後、代表グループの問いを基に全体で話し合い、吟味させることで、本時の問いを創り出すことができるようにする。また、展開において、音読を取り入れることで、話し合ったことについての理解を深めたり、話し合ったことと音読したことを基に本時の問いに対する考えを再度書かせることで、考えを確かなものにしたりすることができるようにする。
研究内容２の手立て	**【子どもが自ら学習を調整するための学習サイクルの在り方】** 本時では、始めと終わりに書いた考えを比較して考えが変容した箇所やその理由を確認することで、学びを実感したり、言葉の力を自覚したりすることができるようにする。

○　子どもの姿からの報告

研究内容１：子どもが自覚的に問いを解決する学びのプロセスの在り方

〈問い創りのステップ〉

ステップ１

山場でのクルルとカララの会話部分を省いた第５場面をタブレット型端末で配信する。

T：気付いたことはありますか。
（※大半が気付いていないなか）
C1：34～36（２人の会話部分）がありません。
T：気付いていない人が多いということは、34～36 は、山場での人物関係を考えるうえでいらないということかな。

ステップ２

T：34～36（２人の会話部分）が「いる・必要」は「○」、「いらない・必要ない」は「×」を選び、理由を書いて提出しましょう。

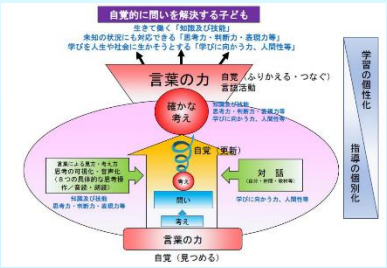
① 考　え

ステップ３

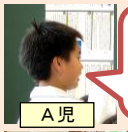
T：（学級全体の考えの状況を確認した後）何をはっきりさせたいかな。
C：34～36（２人の会話部分）がいるか、いらないかをはっきりさせたい。
T：（全体の反応を確認した後）いるか、いらないかをはっきりさせたいんだね。では、グループで問いを創ってみましょう。

グループでの問い創り

本研究部では、「子どもが自覚的に問いを解決する学びのプロセス（下図）」を定め、問いの設定と、理解した内容を深める音読・朗読（音声化）に着目し、確かな考えを創造する本プロセスの在り方を究明しているところです。



② 問　い



A児

僕たちのグループは、「34～36 の心情の変化は何だろう。」という問いを創りました。

B児

今日は山場での人物関係だから、「34～36 は、山場での人物関係を捉えるうえで大切だろうか。」の方が、問いとしてはよいと思います。

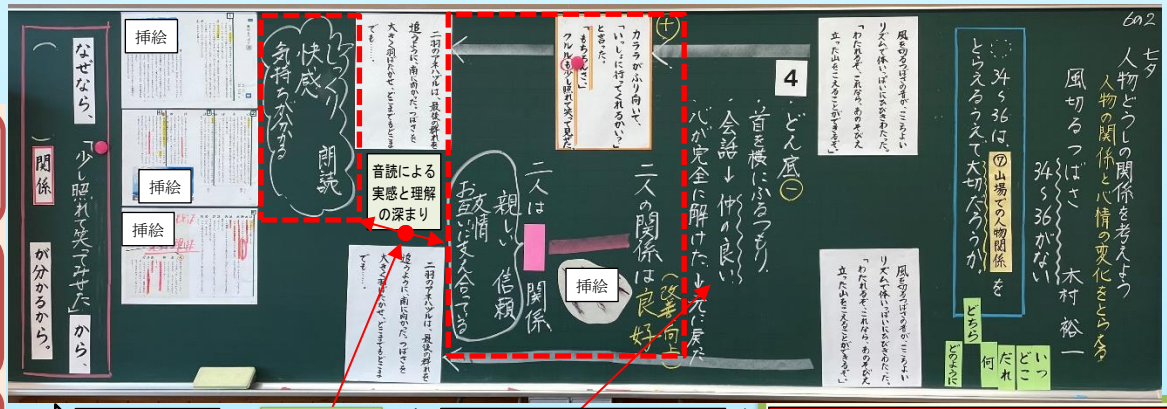
少し長い感じがするから、短くできるといいと思うけど、これ以上は短くできないような…。

〈問いが創られるまで〉

問い①「34～36 の心情の変化は何だろう。」※代表グループ
↓ ★更新する。
問い②「34～36 は、山場での人物関係を捉えるうえで大切だろうか。」
↓ ★全体の納得を得る。
問い③（短くできないか検討するが、問い②の形がよいと全体が納得する。）
↓

創り出した問い

34～36 は、山場での人物関係を捉えるうえで大切だろうか。

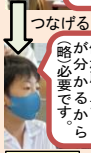


34～36 は、山場での人物関係を捉えるうえで大切だろうか。

③ 考　え

第四場面のどん底に変わったことが分かるので略。必要です。

つなげる



解けた心が完全に戻った二人の関係が分かるから略。必要です。

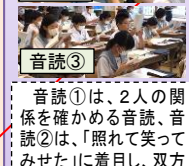
C児

問いを創った代表グループの考えを基に、問いに対する考えを話し合っていきました。

音読

音読①

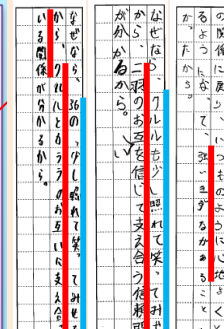
音読②



音読③

音読①は、２人の関係を確かめる音読、音読②は、「照れて笑ってみせた」に着目し、双方の心情の変化から関係を実感する音読です。音読③は、２人の会話部分を省いた音読とそうでない音読とを比較する音読です。

④ 確かな考え



A児　B児　C児　D児

話し合ったことと音読したことを基に、問いに対する考えを確かなものにしていきました。青色が基にした描写、赤色が捉えた２人の関係です。

⑤ 考えの変容とその理由・問いを解決した感想（学びの実感・言葉の力の自覚）

話し合ったことと音読したことを基に、問いに対する考えを書き、互いに交流していきました。

D児

考えが変わったきっかけは何ですか？

私は、考えが「○（いる）→×（いらない）→○（いる）」に変わりました。まず、■さんの考えを聞いて「○→×」になりました。ですが、その後にみんなの話合いでの考えを聞いて、さらに「×→○」に変わりました。

自分たちが創った問いを解決してみた感想は？

実際に問いを創って解決してみて、問いを創るには、学習の見通しが分かっていないと難しいということが分かりました。

A児

研究内容2：子どもが自ら学習を調整するための学習サイクルの在り方

○　考察

研究内容１　問い創りのステップ１～３を経て代表グループが創った問いは、他の多くのグループが創った人物関係の視点からの問いではなく、心情の変化を視点にした問いであった。しかし、代表グループの問いを基に全体で話し合い、吟味したことで、本時の目標に迫る人物関係を視点にした問いへと修正された。今回、他の多くのグループの視点が人物関係から逸れなかった要因は、学習計画で見通しをもたせていたことと、ステップ１～３を踏み、ステップ３で現状の把握と、何を明確にしたいかを確認したことではないかと考える。今後は、グループによる問い創りの経験で高めた力を基に、個々が問いを創り、そこから全体で本時の問いを創り出すような展開を模索していきたい。また、ステップ１・２に、単元の導入やその後の解決の過程で抱いた子どもの思いや考えを生かした展開についても模索していきたい。音読については、音読によって２人の相互関係を確かめ、その理解を深める姿が見られた。引き続き音読の設定場面や意図を明確にし、実感と理解を深める音読の在り方を模索していきたい。

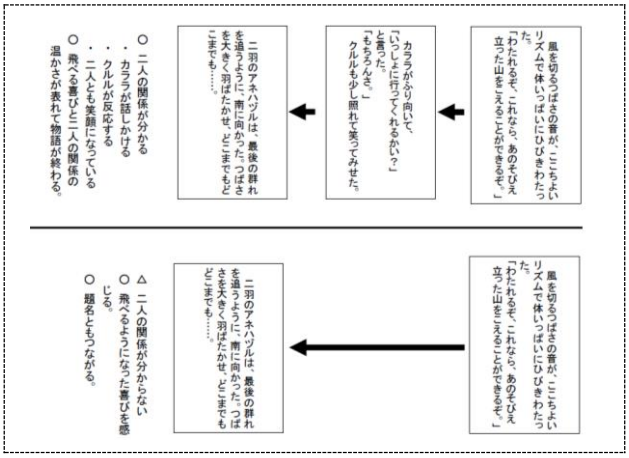
研究内容２　ふりかえりでのD児の発言は、自分の考えの変容から学びを実感している姿である。D児は、考えがA→B→A′と変容している。本時は、ステップ２で多くが「○（いる）」を選択したため、「A→A′」の変容が多くなっている。授業者が、本時ではどの変容パターンがどの程度表れるかを想定して授業デザインを行い、目標達成に迫っていくかが重要であることが確認できた。また、学習中、学習後において、個々の考えがどの変容パターンに当てはまり、そのことも踏まえて評価することで子どもの思考（読み）をより明確に捉えることができることも確認できた。一方、D児の変容は、同グループの仲間の考えや全体での話合いがきっかけであることが分かった。しかし、それらの考えがどのような考えであり、なぜ変容するに至ったかまでは時間内に取り上げきれなかった。その場で掘り下げ、そのことを全体で共有できるようなふりかえりの在り方を今後も追求したい。

御意見・御質問はこちら（研究部アドレス）
miyafuken@cc.miyazaki-u.ac.jp

○　本時の目標

登場人物の相互関係について、描写を基に捉えることができる。

○　本時の指導過程

学習活動及び学習内容	教師のかかわり
1　本時の学習について話し合う。 ○　２人の会話部分が省かれた最終場面 ○　２人の会話部分の必要性（考えとその理由） ○　本時の問題点（問題点の把握） ・「２人が会話するところが『いる』、『いらない』の２つの考えに分かれているな。」　等 ○　問い ２人の会話するところは、いる、いらないのどちらなのだろうか。	○　クルルとカララの会話部分が省かれた最終場面をタブレット型端末で配信し、音読によって省かれた部分に気付かせることで、２人の会話部分に着目し、その必要性を考えることができるようにする。 ○　クルルとカララの会話部分が必要かどうかについて、各自の考えとその理由をタブレット型端末で提出し、全体で確認する。その後、代表グループの問いを基に全体で話し合い、吟味させることで、本時の問いを創り出すことができるようにする。
2　解決の見通しをもつ。 ○　解決の見通し ・　解決すべき問いとゴールイメージの確認 ・　思考の可視化（ノート、タブレット型端末等） ・　形態（小グループ→全体）　等	○　教師への質問の時間を設定し、問いの解決に当たっての疑問や不安等を全体で共有し、その対応を確認することで、クルルとカララの会話部分の必要性を解決するための見通しをもてるようにする。
3　２人の会話部分の必要性について話し合う。 ○　２人の会話部分の必要性  	○　問いを創り出した代表グループの考えを基に、「①共通点・類似点→②質問・意見→③相違点」の順で話し合わせることで、話合いの手順を理解し、考えを広げたり深めたりすることができるようにする。 ○　第４場面の「首を横にふるつもりだった」、「カララは何も言わなかった」等の描写と関連付けさせることで、クルルとカララの心情の変化が表れていることを捉えることができるようにする。 ○　２人の会話部分を省いた音読と、そうでない音読とを比較し、最後まで読み終えた感じ方の違いに気付かせることで、２人の関係の深まりを実感し、話し合ったことの理解を深められるようにする。
4　話し合ったことと音読したことを基に、２人の会話部分の必要性に対する考えを確かにする。 ○　２人の会話部分の必要性（確かな考え） （例）２人の会話するところは、必要である。なぜなら、２人が会話する様子から、２人の関係が良くなったことが分かるからである。	★　話し合ったことと音読したことを基に、「関係」という言葉を用いて、一度、小グループ内で２人の会話部分の必要性について、考えを伝え合わせる。その後、考えを書かせることで、考えを確かなものにすることができるようにする。
5　本時の学習をふりかえる。 ○　考えの変容とその理由 ・　本時の始めと終わりに書いた考えの変化 ○　問いを解決した感想（始めの代表グループ）	○　本時の始めと終わりに書いた考えを比較し、変容した箇所や理由を確認させることで、本時の学びを実感したり、言葉の力を自覚したりすることができるようにする。

○　本時の評価規準

クルルとカララの互いの関係について、描写を基に捉えている。　（思考・判断・表現①）【記述分析】